



時代
摸画

遊家奇人譜

下



中島家藏

能家家人後世之下

竹窓玄玄一遺稿 意屋書事冬行

中川乙申

菱徳谷虫ハ勢陽山田の社司此姓名を渡り大申川梅
 我あこ乙申と改む後一隠栖のん清一て凡人を會する
 夏我嫌ひ居を夏細此百小管一匂ら号一そ夏林舎
 こいふ此子蕉翁の末弟一々致後ハ支考涼菴等
 後一が始末に個々一荒塚に當此はト多や飾繩くさね翠
 此肩おほふるんや夜よぐえ一秋を道くまほはおみぢ赤禁あか赤あか一
 函あち鼻はなのかままぬ家一喰くまとも漢あま此こ真砂まや冬ふゆ花はな
 疎あり一冬ふゆ雪ゆきうるハ一よ把や拍ぱを筑つく出いりり山やま横よこ一采さい花はな我
 巨淋きんいろ飛とで坊ぼく老後らうごの諸しよ作さくと不ふ拘く理り云いら重じゆう正せい風ふうののままを

待ら至るに或時麦林舎又某園にて入来る客阿まいはく
 我能得我学と記志あ水ども主式むつりく堂の下おの
 若小と道入居きも路阿里やと答く曰く志さ人深切
 なれは古抄み六々愛とのもあふに又いふ我句の何様
 復我申し侍るや答く唯眼前の楓橋を云はる抄を我
 一句作く世せむ人安たるよりちり己守り我君はるに
 折りも冬も春もて富人かよ心男此いと寄げ又流打くさ
 折を指せしそ阿まが便ち我句の流安ありとて百姓若流
 かとげ抄さむ抄り奈又附合れ轉變に及でん尚時人右
 出係者なりといふ家小云とりの寄流阿至一年涼意を刺
 若こして支考乙申今我催すを我の息を争ひし小田が「若
 僧の影を俳句よみせて」といふ妙句を吐くいりて此句よ言

息ふらえやと各汗流なりたるに新妻の片一何ひ存と
 紙筆その句我房これが一産ありまびくきをいおぬ院
 つれもて五抄ほど小一裁ふて三月と板いりみおとのふお句
 おうり支考我揚々一き僧の良我仏抄よとてと意と傷
 息を替む考答く一生此すとも句とあふんり我忍む家
 の妙句を惜むもまといひりいといと無と添く是し或人豊の位
 家依の百款ふるい何の玄婦いりやうやと居ぬ一に
 我も右採れりまふに償も未復添く知んとあらば先替の
 編おける虫ども我亦く刃と申しと申りる是あそ初ん此
 用を寄る修り我言つにせよといふ流澄とむぐき云ふら
 んり流り又杜里戲揚を好むの癖何りつ人種く
 の人も文小咬入に人な澄て曰く我の抄つる何ふに流澄抄流



伊家奇人談 卷之下

丈人容考きバ句作もたれつゝ右を侍る能らば折原の托里
 小異哉權一三様ひく傷一一案する時のそ愛化は後れず
 我も世塵よ昔んをば能信に志を嘗ふ若あ里に終り身
 成終る候で遊興と屋おはとちん一日戲場へけし小お儀
 水る娼妓隣友友へ東居るるが後のす小打浴に終日酒酌を
 一け至次おはも亦同侍の人何とく又よりるに又むふの
 寂寂にけ白の娼妓東王録菓子赤と福里すれり一変ふど
 中きりるる時「涼州」や夕日河ちりけ岸又候とふ詠けり
 け水も托里代交と老の身も隨屋すく右人お水も滅むるい
 手歌ぶ人よあまゝ能り此子若如初のそ思を覺してそ溜
 に能らばそのいんば一や活の園交が起り一そ云を咬ともそ能
 仍い我もがれればそ人我はすくもはとつ人妻波が揚徳を

海北何より強るよ一載一海も証とすん一

舎羅

え録の以全羅の流をう怪して賢と種小の名を以て
 若あり一蒲の穂や倒り里たる朝の妻一か案れそらふと
 畑や九月屋を庭を候初る依身が新瑞送をうけく雨露
 を凌ぎそ流成教く禱と以実り一燈石の儲ちくつま
 女と腫巻を束む全珠の物枝その風流を傳く笑その意
 残付ひるるに幸ひ羅とあよちく目北着席まで信里
 凌けぬ危る一て後ち空く成事水ご子豆飲食の没け
 ち一校憶うぬ何ぞ後みさぐおや何ると居居する
 小羅あつて一壁立此負家あつけつ死つおち一信や替
 水ある紙袋一米の何るが焚るあおらせんは枝の心

之を揃るに漸く米計合はうりも何ふんといふ程田くを
 米まで何人の口糧を蓄ひおだしはすれは後娘らも御ち
 ねはわらせしと枝保あがももを徹量の俵女らもまじ
 感しありきや或年此より勾窓へ巻は文よ
 去つて變りしに拵しして飯屋にゆくを徳若神所は夜盗
 のうりして盗りたさむら討ひぬる程い入居き西も有
 屋敷し仕合のたまを考うていられども是ぞとん掛らる
 月や大なり此聖あくありんば「盗」色酒がな味をあら
 惣母とおうしてお中のみを以て種徳材の地は居らま
 いて「ぬすまれ」手揃と云う「何ぞなあり」と
 吾等流まんぬ屋

赤松川村

赤松川村の伊賀村人なり尾の名護屋よりすなり蕨つ
 の古老なる時人い川く金博小枝河り護城に赤松
 ありと稱し三里とや「有てな相角あり」ろや恒牛
 「後居や先く事くおるまま」は「形く」や櫓の
 音る此「形」のたしくは同す種業り赤松河双して後
 私説をかあく異風候と云ふ流の支考は水を發して
 送まる又河り名く赤松川費といふ川流て返答の忠
 作く吾等を解く是を名く合相掛と号は

赤松百里 附琴風

赤松百里の魚を鵜く業と云はれ又は田く我始を
 蕨つ入里一時の茅風といふは後年中唐よりまじりて
 三十六年又いちく蕨つ「松風仙風河り仙風を子世に

世に十一二歳の友あり後嵐使を命成交々廿一歳
 百里と改む今日又對面で能借一日と絶つ三三三の歌
 すまゝ一残くはるぎに精上依極門戸後世「家はる」一
 擧起りり鬮鬮治徳泣して云く鬮鬮のびらふち小尺ゆるる
 我後茶植ての後と是よりして冬北終入りり此子家
 毎ぐ夜に調理を能す生作ゆる物その肉を耳作る
 るに物ちりり一寝我舎して馳走す極は酒の烟人北室む
 取り一定る時終日終夜とりんども生福を多り人すと
 生善後よりて風流なるり又初の新の如く享保十二年五月
 六十二歳にて死に辞世「死ぐ重て凍き月を足るどくし
 生子生家守すと種波何里を流る」巧あるよと後世人の
 知る所あり

琴風と種波の何れかの江よりう江戸へ来々「蕉海のつよ
 阿そふ妙双して後晋子に後々「学ふといふ如羅架と号に
 「吾亦老眠里居る」柳の家「室舎やいおけお記子おす福
 ら海に「猶北急嵐とそらに家あり」買時すつる白赤
 吾あつり尚時琴風百里と「重く種せし海考く「お紅」
 俚里病ぞ死に辞世「一息は此味ひと妻れあり」
 津川湖十

湖十の江戸人晋子後々業を交々初め津川は恒て
 より代く此我氏と氏幼なる時を選出といひ後老嵐と改
 免又嵐肝ともいを「梅が香やゆゆと去けめ井の腰王
 「志をふるも雲の急ちり」梅北急「後掛の母のをり」一
 嘗り赤「徳坂の長刀阿ふる吾我友と赤此人容貌吳沖あり

落髪して鬘の書は尺餘身小の法衣を著し一瓊子と改
 名し或掛く里新嘉坡のおまゝにて平生をたたり或は
 その性冷然を好む天目酒一盞成以て度とす確まは
 又此世あり一人の確々法時成りたりなり一又三年
 六十餘年一して終り

秋色

秋色を武江若人ほめ照澤町菓子屋大目が妻とあり
 時ハ秋といひ少少あり風俗のせは有り十三四歳
 妻正時のおまゝなり清水寺觀音堂にうら井の端の橋
 を見て「井戸端の橋何ぶち」泥の碎る枯枝の落つる聲
 に切る「おは」るるが本くみ附くる信奇極句我目く
 是あ月名甲乙を降し一むひ一み世句お一なべてそは

秀逸小極しぬ後代までと秋色橋と名をたし一もはと
 宜きるはや晋子入りの時「此ら里子氣に並ぶ女う糸
 逐る業成く」雪つとに翠簾はげく雅書ちる人涼糸
 「このふの紅禁又お里は女この「獨居やまらみ火研らね
 半此柳河豊終年投湯」して雨はと冬多し多し秋色が
 家残るとはあり一そ致後志はくく沙岩息市を借り
 用中晩年又及ぶ湖十「是を借すといふ一年何果
 侯の山花は石橋を庭園着る一「英弓一して姑觀せし
 吹ゆ色が父さいをひの折とそお彩り身を屋川一公忠
 修り「尺餘」が折長雨をげく障り一「阪海を望
 樂哉管トて送らせらるる母父の信一そ草菅世法をたし
 智昇どもに團圓のひつけそる小父と入りり里を紙合羽を

伊家奇人談
真



海この竹子笠うちふ里振言く引阿げ幣又流く飯里
知る者交うありありとどは孝うて板ちるる大率
此類ちり享保十年四月身はうりぬ詩世一尺一夏の覚
て毛色はう紀つばこ

紀文初子

紀文の江戸の人回苗紀修玉屋又たつと紀の熊野の産はり
或は人出てより証来父子ともに古う一毎り或は紀清茂
多しんて晋子うう学び父を教ぬといひ子を山といふ
一人おのけを松字津の帳う一馬ううや年の種どもお回ら存
教ぬは句「名り人す老の眼や古用千五名集う」千山初電
室舟の傍りよそ角「隔又菓を縁音あをぬらん又るぬは
千山字年忘う一割すもや八乙め神楽男あり蓋一世

意衝此遊興のみを唱く空風協あるる我稱きは

櫻井吏登

櫻井吏登の江戸の人嵐叟に結くはあぶ周竹とその言
牙さるがぬ小妙又奴あ小を兵市を附とせらははといふ
とと已院う一巻た里とと伊ち之杖堂又懐る園く此
子を以く雪中二世に神免人左うと班象ともいりり
嘗て衆の勃よりそ若且に嵐雪といひ一が種あく又
吏登に更む老後深川也徳代巻う一ト居きう一はひあふ二
板を委はみ小て出杖つと杖を垂が實に播を容るの席
もたう一宿幕く徳海村をおくれと録る人のたは何こ
はず先の審いづる杖待く入て風法すと奈んいづも
小いうも清一そ風韻の幽玄なる尚ほ又和す侍者あく

實小陽春白雪とや稱すべし。猿子銭巻よりの裁り句
 ありしと数年の海客を棄去て唯十八歳成摺びあると
 奈里「梅咲く阿つり小喜ハちり里りり」大竹やんを物む
 之紀五六月「急すく記在いほのく」と昭あぐら「老の秋唄
 六を愛おも志沙さ又自像自像」おく新や何小なれとの
 古茄子室曆四年六月廿五日銭巻く卒る

水間治徳

水間次郎有海江戸村人その徳工と里一耐より徳満を好
 流云成沙と足折良の風虎と治二公此は例りも列里一
 一年 飛鳥井種孝以和舟の夏小より奥志岩城く左近忠
 耐 露公との耐回を慰まおらに治伽の老我摺バせらる徳
 み赤荒く愛武史妙みゆ名公家と達のおま小の徳に

如何す人記と思案の折うら法をたつを進る者有り使し
 是ましくふく此旨信を咬せ刺髪きり免く名我友毎と改
 彼口二年不ど配取ふたをりるるも移夕は例ふ信く和奇は
 古き夏まど懐あふく宿官せまるとと種ふく帰治一玉小の
 友赤ふむう内て回りの油うちり此和奇ふよ内はちり
 只徳満妙みを修りす屋一と生生れちりり清徳は才
 阿原のまんぬ一一直ちふ露公の教を交はしめ露茶といひ
 後治徳と改む日く夜くふ上達一遂一風銭記一享保の
 此まいといを以て垂り嗜り合飲茶と号は「え白と旅人を
 入る張りか後四卷句何「旅人も種茶を喰く又何く」百姓此茶の徳
 や徳志意「徳拍何生と魚」て網籠の意「水と羽と合はく徳
 夕すくみけ人能出とる一在巻一長加ふるこて餘朱餘毫揮毫

即揮毫といひ又字成世此亦小代より今朱墨未点是能なる
る此人我始に其字係十一筆あり之筆六十二筆ありて及十

葉長活涼 附仍尚

活涼と伊賀葉長の人地名を以て性といはれ初名房は云とせ
東武く東の一鼎うつ小入く南仙といつ里後活涼云の教を以て
より活涼と改む其時姓白十知活涼云や或能波云の長成
程中活涼と南仙と号は「活涼」のや或の隣を去けむ免
「吾は活涼素性なり」云に「活涼」の一里と復の和郎云「活涼」
り其葉長我みせく福壽葉素より多才よりく和涼は出り
活涼より述する所能活涼綿石益実答はく江戸砂子亦長七
活涼種ぐの作何月く後人より活涼は活涼一つは「延享四年
神田小橋く死より六十有餘葉なり其長父仍尚はく風流あり

其長今と号す句何里「齡はるまはりの今和長云

大渡三千風

大渡氏と伊勢村人一名和字友輔十五歳より其能活を是は性
敏ゆり妙を名らざる身より獨立すといふ三十一の時和つ
るのく若空と名く延享中一月小獨吟三千句成吐く句編り
三子風といふ寓云云又無不非軒と号は「此いなり和長云
和長「是小来よと笠叩く一禁うか田方より和長一て其の仙居
小留るまといふ年婦より一和長く去ゆり又出く和長大渡
北沢邊より和長恒に母子生得名利のふよりく三和長和長一勸
進して空能より和長を建くといふ小和長が妻處に小和長を
あま一和長活を和長古法妙に造和長は是を先年式に和長
和長活は和長一和長活を和長一和長活を和長一和長活を和長

耳一歳已知あがらるるちるの及をおひの獲猪ちるるなりや
 其肘の口号一様や布面仍よりるるぎは是より布面仍より人
 此呼けると奈少回而一碑我建く東往居士と自稱
 言形跡の言違を口り口り口り此白我以言命初なる
 居一これ送云方々全穉世「今日ど子アヌ世の極此衣ぐ」

立羽不角 附辰角

立羽不角ハ江越若人あぐりより不トグフ小入り枯葉
 小して雜髪せり空時此句「け一城立本の端でち一葉の端
 松月雲と号す虚雲秋南南舎ともいふを千翁と稱するを
 つ子子人より傳ゆるよと名出あり虫と待水小学び画ハ獨
 立一々句ら楽む初め虫を号し一里一肘嘗く冠里公の法能
 に待葉一照る之且之次者お侍す法とて「は雜煮やあとい

五元集作
 狭や同船
 寺晋子因
 工不知何先

綜
 力

疎
 水

草
 心

草
 心

解
 考



千公羽畫替



非
 家
 奇
 人
 談

河ぐると物此妻とて奉りりる生年此及公御政の職
 補せられ玉ふのち法存候斜ちり以文より寵遇化は是
 或時公「笈比夜や長居をふくく子取ま」と戯れの言候に應て
 「坂の齒を立ばか」はありたにはせも是又遠く伴判
 よく次牙小察留して匂ら千金名富成爲王正徳の初免量
 御より演御く轡也する時法才は借錢を序附てと有出
 「二月の晦日家裁此はらひうある」と亦く京橋邊へ「地室成
 亦く後居に打首 官家より江戸中の居宅成丈七尋
 造る爲屋」と法洵河里より使ち至有後ひあくくり
 茲造中成た里より裁程もなく類焼して数年著速成雲
 何ぞ成失いぬ控まども有欲満きようん亦等今世に切り
 此人之縁申は法橋に進み享保申小法眼へ昇る能きと法

昭とばり里虫一たるの世人小限候なるべし始め生に男辰
 南飯倉町小河家の養子と志保姑此氣變むつりしてて生
 出きし依を満く「超王火」いぶりくして洞く亦又けむい
 ぬ我すれの麻安把故きり余終り「あこ」書家く廣く八十
 子をすそ卒ま里とと晩年居候銀治橋つかは秘す其に
 變風して一流をなはは是代化ると稱す皆人の知形ある
 宝曆三年六月九十二歳の壽を終ふ祥世「空蟬」の素たの
 裸へ一返りけり

大高子葉

大高子葉の攝陽赤城北士燃帝我治徳小は京娘「日小」けり
 いざ茶いれう山橋「初」の江戸共考子と四季の汗筆角を
 今も又又傳時をうりる人此句成集る小「短尺」又又名や

句後合于時海士回人して後讐の晴妙れ人猶る虫

之後を彼是は世々者背本意の何我根は堅意又成成は

いや年束は強意の成成一通りお修人中の柄を拙考る

西存の節難悲心今懐存立中の統は度は厚情彼色似

生く世く小及のりには存人内我根ちるる色おて松れ

音程く去物竹平も同じ及ふてい滴泉と西存の如く

西君備君蒲室中更のてそ怪打捨壺中の一句は引身奉

頼の 十二月十五日

子禁

法徳生妙く

昭る年北表合欽崇して追牌發句一立於法も程法梅れ光る

うか法徳一尋る一此亭子那之洞く奈其角一枝禁法で名残の雲

北光うか法洲一立賢は名と云ふ在象云澄りか白法浦と友人

必雲初と少く一吐と梅は文武具茶湯手向ゆ是と子禁

茶子我嘴一有とと又との自作者茶取出来より一さて持信

一守室せ一は是法海士何果の池小尺とあり

加藤厚松

加藤系松と名好笠智此人武也一伴雲の春音子を妙うて風

顔何の猩猩庵と号す歎る父学を似く又伊又受受初る

後く得言我修す初め若るなり一時伊賀法阿法津小徳を後

上時く一恒せり虎野居士と自称す老後法話人出く宗妙

と意願の予は智つ人個肩の奇り也一頂一水何里くも松守一待

實中世は命と誓之のよと主瀧落可思智く妙ん古れ信末

骸骨を画賛我色ふ妻より秋と針を漸くくちれく一葉

や秋は雲のやみみつ筆を拙て卒然及つ人此句をきりて

辭世と為といふ附り、寛保二年あり

系元を個肩と稱し、松濱八幡の人、片を系元、松は後、あぶらぎ
酒成好く、言氣情懐、すは調、すこ人、せらみん、じゆん、す、一、僅、く、と
弘奴、修く、月、尺、寸、家、一、神、雷、や、舞、舞、舞、の、彩、み、何、り、世、無、常
他、志、の、屬、小、の、河、上、に、け、ら、采、田、子、は、他、よ、り、
て、家、一、累、に

松本澄澄

松本、式、の、江、戸、者、人、晋、子、ちか、か、の、後、く、片、を、修、る、初、め、潤、坊、と、名、
附、長、生、房、仙、存、が、系、澄、に、ゆ、く、古、又、嚙、と、史、記、已、も、覺、て、半、附、
房、澄、澄、と、改、名、ぎ、ま、ん、の、定、り、ち、う、一、仙、存、と、お、對、し、て、と
人、此、身、同、成、器、お、つ、う、の、せ、り、室、仲、英、邁、の、才、河、内、で、半、格、も、及、び
有、り、表、後、を、い、極、く、室、享、保、此、比、名、田、才、小、農、小、江、戸、小、て、羅
人、半、秋、を、つ、子、あ、い、の、治、遠、を、い、奥、洞、美、玉、成、澄、が、人、り、お、ま

能、借、此、句、を、里、我、弘、く、り、さ、い、が、う、、の、春、城、は、、樹、株、の、、冬、あ、も、り、、ま、業、成
は、れ、が、思、人、が、年、一、夜、と、此、句、を、裡、ひ、ち、て、此、古、奇、を、多、く、老
衰、に、け、く、い、ひ、下、の、句、は、二、月、中、旬、あ、り、を、輔、と、の、り、、言、古、
我、ふ、あ、つ、る、冬、と、妻、と、の、ゆ、ひ、ど、冬、を、い、つ、る、何、ま、と、言、我、屋
た、る、吟、詠、ぎん、えい、の、附、り、、室、曆、十、一、年、、霜、月、八、十、八、、集、一、、て、、歿
す、旧、系、し、う、けい、、の、何、り、、と、免、死、す、る、、月、を、定、り、、係、中、、「、孫、雲、や、杖
で、画、が、ゑ、一、、、最、士、、忠、由、と、、作、、王、、壱、一、、が、、時、、月、、符、、若、、我、、合、、と、、係、と
亦、あ、も、ち、、な、、り、、世、、子、、は、、ど、、め、、の、、あ、、ふ、、出、、の、、句、、を、、て、、「、梅、、此、、最、、あ、、て、、何
梅、の、好、、も、、の、、つ、、中、、小、、糸、、一、、て、、二、、交、、き、、一、、む、、舉、、く、、曉、、る、、若、、ち、、一、、室
小、異、、後、、致、、至、、席、、と、、い、、つ、、る、、能、、存、、何、、り、、此、、子、、お、、な、、者、、後、、も、、の、、異、、所
一、滴、一、に、梅、二、本、と、、ら、、ふ、、句、、我、、碑、、と、、取、、つ、、け、、ら、、り、、是、、を、、不、、く、、人、
て、梅、、意、、の、、句、、解、、一、た、、里、、と、、赤、、ん、、云、、あ、、ら、、の、、釋、、を、、我、、問、、答、、す、る、

此して作廢置る矣の意いと旨一財答くむ免れ意と有
此後名づつひを知らるる一重幕幕すを稱すべし

素園名作

素園氏も久し我といふ道徳一して平三宿そのいり晋子
此つくのく名を平砂と改む平三宿後より久作
此後素園の時と号に「出く三日人あふいり小猶の意」孫
不夜に又ゆる姑舟う素「神風やはちるも」
海きのの盤も糖もある今日此舟人と成り久作律義
て人多く初み集落ふんづく子禁治律若素帆
砂を平三宿竹平素帆と改む素帆と改む素帆と改む
年三月浅形素園より何れもく彼教業古口才一
素帆を繕一たり素帆友人に繕られ素帆素帆素帆

此せし小ふ素竹平素帆お合ひ繕く名を繕く素園一
此後素園の時と号に「出く三日人あふいり小猶の意」
海きのの盤も糖もある今日此舟人と成り久作律義
て人多く初み集落ふんづく子禁治律若素帆
砂を平三宿竹平素帆と改む素帆と改む素帆と改む
年三月浅形素園より何れもく彼教業古口才一
素帆を繕一たり素帆友人に繕られ素帆素帆素帆

四馬五此手六龍七雛九雅

番勝 懷紙勝



鳥

一点

山

銀

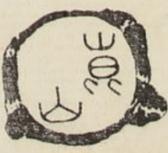
一点二半



金

一半

魯



雛

二

字三存字

一日長安花

松色

字子

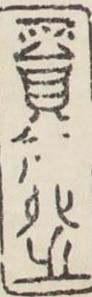


萬國冠 拜冕旒

珠

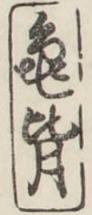
蜀江錦

志



食綺

吳綾



王鳥羽



魚



後

龜背

不肖

回雪

五の

米

大極

新月色

次中

長

蒼眞

同文錦字詩

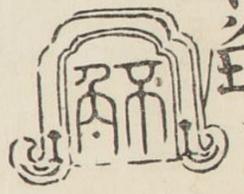
貞

豪

鯉漢

花影上欄干

田十 榮 芥 六



師王鳴齋

明陽鳳

師王鳴齋 明陽鳳

年時度



龍



生枝玉子

元兒醉茶

無

入里皇後多勢我殺害一山曉がこ小西門片一て引流
云はくまゆりまを母の先日春帳が寝里一寝句の言すゆ
口人とも必ら尻中申に洩はく己湯一毛入らすを恥ゆを
直一了言纏は里或る舖に入り名記一橋をばあは
才何り今語あす里小倉卒此るゆゆ名價の持来らず後日
お遠方よく拂はる一を賃と一て此羽織片一並ふありこ
何某候ありお飲の物ぬひで巻一己を泉岳寺此つあ
いたり言超まけ中に多表版や此片は大字版や在体
幕酒よあらせら一違せて多と叫り子 寝家あり
藝後此武士あそと某里門戸我等しく入は里る後すん
ちかくてつかよあう人一がそ油切や通どけんそ申小知家
人何りそ大に感どそ修捨並好よ屋ぬすの得てしは

風せし友佐の言を我諭り取返何某候の在籍又はく里敷
 やは産屋に中よれば子産は前くある何用や里やと産屋に
 答く今取立りくはるり又ては級附の存折を質物を入産
 申名為急はそでけ中よ産をりて汗汗ありて居る里
 敷いさうしく思ひたその旨実ある我祿員一玉つると家量
 又或時種分れ句さて「何意もなれ種分れりいふ十二文字我
 取より種れどもよ此又字を産屋みりり折是祿員材
 束里一に澄どける小畑いなく野分の意志の十二文字又て
 取より字校合はんとせば二候は渡り悪う里ふんと是
 依る十二文字小種分れ一句を定りりや此人取後又つ
 子その遠出小取題して種分れと名一と是ゆ名有り享徳十
 九年九月六十五歳一と一書まを産屋句り「申様よ必り申

皇王十三夜

活井舊室

活井旧室の江戸商人梅孫の風我慕ひ能信に親練ちり或の
 賄賂坊ともいり身の文大うて人共とんぐ之を懼る世
 云物切と稱せし依る性冷小は我好む一日碎果して或敷
 細家の形小立家るるが面をたる小必ひを道場くよめめ紀
 のく少と試合んる我はむ少とを容貌のぬく候一き
 我感一お月言才と立合一む室何の着もなく打す多
 られ乍ちとあ人を扱出して「夕立にうこれと廻る田面裁
 皆おま我んるく不掛倒一ある材有りはは我掛く必ひ
 くり又その風流あるま羨一とうや羨分れ我かあり極る
 片或酒席より酒のせよと喉れども豆粒のいゝあみ多

伊家奇人談 卷文下

用をまゝし、やむを得ずおぼえあり室怒あぐろを成せし
 遠へても喰物の素一鬼をか或年此三指に「日本絶や五
 地一板河けの素すく孔子忠賢」聖賢をまじりく一の法
 とはやく新迎の賢「道」此実のらんと変りふ親父の家
 系系系大率此類なり

梅海

梅海の伴遊妙人は、ゆゑを奪く業とさせり生珠能
 猶我あ妙人を神風籠と号せしと右老守武をまじり
 高海屋一を附合の己が長ずる所あり、一年加別は極
 せし以金泥おてのま句、一破道中伴おらる時、うりむ
 けく、身此体みの母して何る又一刺業いあれと嘆氣して
 居るといふ梅よまじり、お捨とい物を造すれく此又

字も此法案は素一の詞、稱きう水、とあり、是より加
 陽此能猶あ道あ妙れ半の梅海が風に愛すと、いふ後、
 涼袋世人我妙と、一附合の旨趣を造り、今を集
 関するに「酒妙」と十日の常と淋うてとあるに「巻」つ記
 無が来て居依又一「玉物」の市中妙あらは懼されくといふ
 「供者一通り清盛でいふ又「藤」物徳の灯り記造てくといふ
 「小」米櫃く河月く梅遣いれて、くといふ、何れも梅が附句あり文
 筆此るの疎く、まじりとも、自然と侍る所の清静智と稱嘆
 す

子種上人

子種人は、免竹雨といひ、後上人と改む江平妙、
 後くはあふ中法系河に移住して野田窟と号し、
 住く

高と流麻の本芽う糸巻冠蔭脂花の付三曲を奏し
子我回うは「必成や風吹く云北川藤管論も此君ぬく
何と婦人や「鳴あぶら河越に操の目軽う糸鴨流條景眼
小在り「世成をほや認世が響奥の中程を新音「夜
づ淋は若る時ぬる糸「理りや世色まつり「記の流花
二百とも和平方種その老後と武形くぬりね津言り
号「流名を宋阿といふ妻係二年六月死に年六十有六
祥世「ありうく有とも去らど「西の要

堀内仙雀

堀内仙雀と武形の人活遊を少くは室永中 京洛より
羅人と名を号うは化箇致と号し又長生庵ともいふ
此目成るつちりつと世名ま「海嵐揚又世風と吹く海雲う里

「東陽意の申合く「咲にりり西洋より大象来王ける時
今や引く鼠士北裾野の垣半世向我 邦乃大徳哉
喻せり稱嘆きずんた有るりり「はけ人茶子を嗜む
器哉雲す依北癖阿里又戯画を能すを奇巧むり
立圃許六ももたはく「減むにといふ巻小巻中抽づ
素あ依時をそを藝成意ういて「ぬく「循る是を画及
依宗皇帝のありりよよ水りそを又「う阿里く種ある
人此及びける所なり愛延元年至十月死に七十有四

千代女

千代めを加判松任の人少小より支考のつお拵ぶ考死して
その所を得ず或時若流の盧元材改飾して来りる
そ此旅者小説くお刃し「才子と名極画の越の異後

乙申

唯の

あや

と

しん

我に
KOME
HOKI



上申なり或時画城上小漢を中に三階おれく招致の画
 西をよく画く中下小招自や地よ学出と我何ぶあうり
 主即妙まんぬ屋一始くまはるる時「濃うらうま」ぬ
 と杖若初契王我子我失ひるる時「博地釣今日何あま
 坊とゆふ至情態も怖と思ふ」はド先婆の乙申け女此才
 「文書」の端小「意」のぬ身の靜な依柳うあけ女の件
 乙申此才「文書」の端小「意」のぬ身の靜な依柳うあけ女の件
 同財「玉」をわく同「以」末席は「意」ける千代めま
 又我尺その句を考協し我と同案あまとも狂の一字の靜
 ちる依に及がはに「懺」依まきり至備追あるるはと彩の如
 後子尾こあつと「素」まきとのみ逆「佛」意我修するあり
 卯方「と」あんの東唯一心の言我「百」ちるまも「夢」一解あを

あり尚時能清はらんなりといへども此傳境よ入るの妙法

山口羅人

山口羅人を怪牙奴と号に又由射内とものみ若く里一州の清
澄は後屋里後へ感破して長風を起す嵐山をて「嘗
けや招北人の初櫻」身中へ洞をさほは累々「竹」も本も
人北殺河る種分り家「雪」若目やをにれ種も雪ゆあゆえ又
の比於鄙北能家試旬彦に會して一昼夜を向て俄に
後へ号試改く老種富とのみ怪牙北号を以てつ人羅に
小阿ふとちなり妙子は「め」種屋を四宿とのりる虫種亦り
素より家室といへども天性財務小疎くは牙は衰微し
業茂廢しと此道子の怪牙といひ羅人といひを卑下知
ぬ一宝曆二年五月十四日録して卒

横井世有

横井孫左の尾陽名古屋の室屋なり性淳朴にして文種
を好む能清も長じてを「獨」立に居る人小僧く回く
我は能清北河ちく又つ人もた「唯」正妻ある小僧の旨志
どろふ云いせざるがおけつる又七又よ妙ちふ「一」能名を
世有とのみ松風妙里何交まてを「一」生路の種屋に
種の家「登」良やどちら北能も百よ合は「一」種遊いつはで
かくれり一年松本澄るが己を言ふ里人我懐ると傳人交
初く對面して「一」化物の生解るるり種をば家を誠んある
り大根は妙類あり又述する所の種あるも浦北梅柳又法
小皮翁等の能文その実体して「一」鼓舞員をある比類
なれり「一」先哲も「一」之を稱せり今よこくを世り種

坊す亦名記くそ人の風俗を知居

清水超波

清水長多傳は、の味當商人となり、多風俗の志、何れも
 傳へよ、己が業、成、厭ふ、一日、俄く、驚おろし、く、家、奴の、巴と、長
 此字を合して、長、巴と、改む、折、娘、一、妻、婿、が、伴、く、付、ひ、移、ら、り
 福、お、ど、ろ、い、て、油、何、が、ゆ、あ、め、お、ま、ま、と、い、は、く、産、の、産、ち、は
 此、う、産、け、く、ま、秋、の、お、ち、り、と、答、ふ、福、あ、こ、い、は、く、産、の、産、ち、は
 考、ふ、は、長、多、の、名、と、今、油、が、才、を、は、く、向、ま、佛、借、ふ、の、娘、あ、る、は
 業、が、傳、へ、後、の、名、と、後、ち、大、娘、が、才、を、連、ゆ、に、嫁、し、て、つ
 ん、と、お、お、り、の、福、が、あ、る、所、お、も、遠、を、往、還、す、一、世、の、作、者
 と、あ、る、超、波、と、改、名、し、て、獨、歩、庵、と、号、し、一、水、亭、に、室、を、は、け、た、
 神、が、い、か、一、種、何、ま、び、の、神、を、禱、ふ、お、る、業、誠、く、亦、又、亦、去、隣、す、

物を穿ふ、超、何、り、仙、を、即、色、是、空、空、即、是、色、色、在、空、空、在、色、
 二、空、お、ち、り、と、此、と、お、ち、り、里、別、衣、う、お、た、時、や、此、の、血、を、は、は、き、と、
 山、此、い、も、和、子、回、系、に、作、摩、生、ら、か、ら、ん、と、言、ひ、一、條、身、を、入、
 て、三、端、を、一、河、を、び、や、踏、く、河、が、れ、が、知、里、と、く、は、え、又、又、年、
 三、十、六、業、に、く、死、せ、り、

建部涼伝

建部涼傳、あ、吸、露、庵、と、号、し、初、名、葛、葉、名、里、一、時、の、野、坡、
 ほか、ふ、後、は、治、の、百、川、が、す、く、冬、小、從、ひ、娘、向、を、誓、に、移、し、
 希、因、は、就、此、附、向、の、勢、小、起、く、梅、語、は、依、る、一、年、水、屋、を、在、し、
 時、を、建、部、と、も、い、り、武、の、清、原、に、居、を、却、り、て、あり、涼、傳、事、
 お、風、神、の、靈、を、我、を、こ、改、り、佛、傳、を、受、め、て、此、名、我、傳、傳、あ、る、は、
 ち、或、い、復、是、時、傳、り、傳、り、も、い、り、画、を、好、く、字、禁、殺、の、号、あ、り、

新巻を

徳西へ

あり

徇海へ

三七



笠原にあり

店と

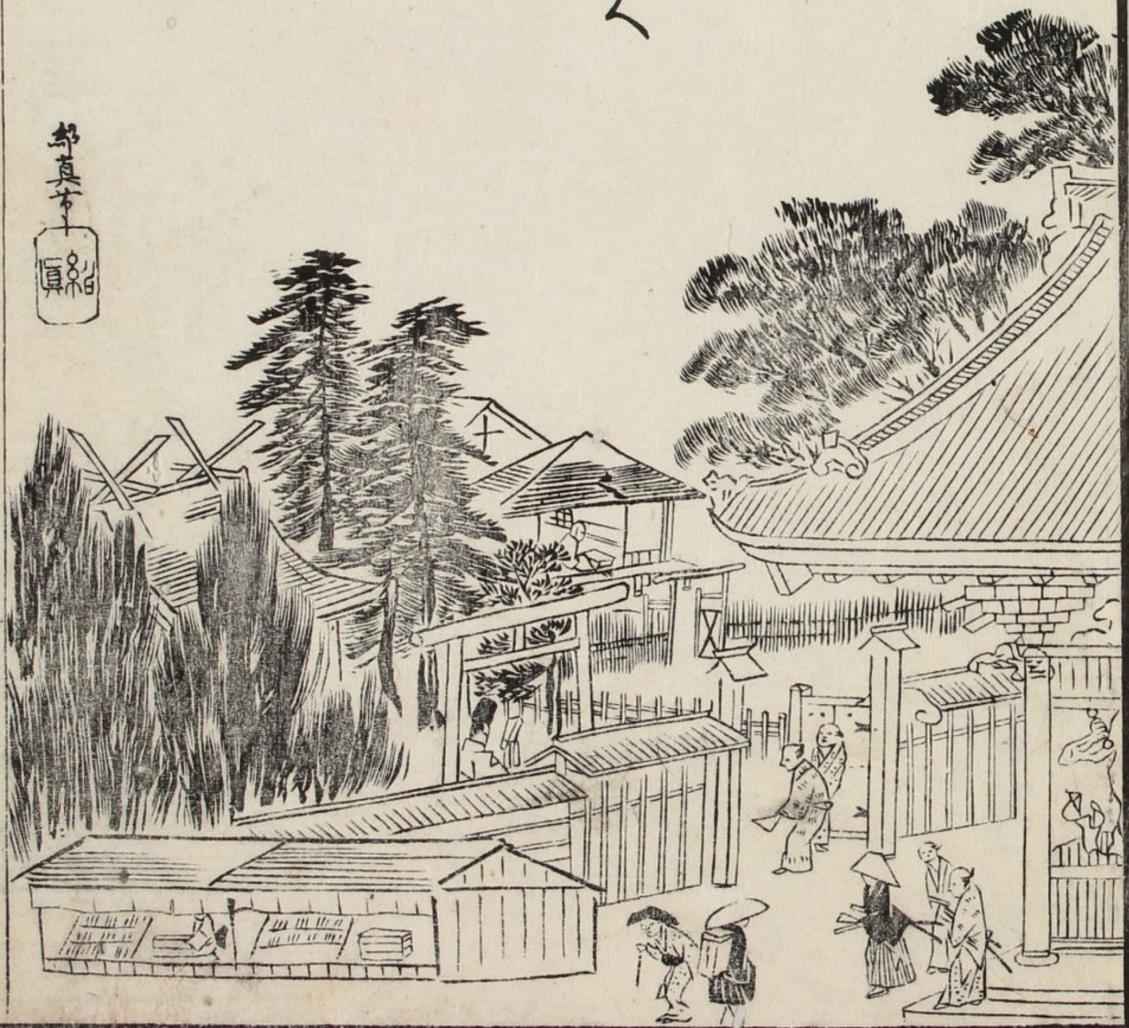
おとろへ

古川

立久社

涼備

都真寺
印



此れが近代伎を以て家成爲せ海に浪を以て澄澄と此人等、
 是れが若者なりとのいふ教句固在りて一風小物に足跡被
 ばりて一に「登此坂の若や」筋のいふ所の「村く」系極
 麗む小妻う系希國の海ぶき一に「浦坊」なる子鳥も飛に
 明にけり「海をわく」濡多く厚白や又月雨淺竹唐威物の時
 徳重く洵多くとて「笠福家唐」とおのり初時西安永甲午
 去三月二十六日某に「世我を海

遊女燈

浮腫のいふ漢「遊女有り」我 船のいみ「市巾」邑
 里に在るさちなく船の荷る家と群一「極表」我魁にあり
 和名ありれめうれめあられめ 海士此子一夜つは皆水邊
 あり此名あり又「世我」我儂儂素するに儂儂の本偶戯なり「世」
 ありん船海に「多」多く遊女の儂儂素するに儂儂の本偶戯なり「世」

昔も此風海河里「右」右今此地也後撰の拾遺後拾遺の宮本
 洞室名「麗」新古今此州玉持あり初若ありひい「近世」江戸有系
 此勝山宗女等の歌よえり「姑」く「盡」く我をいふ「拵」んぐ
 風俗の稀を以て「東武」也里の奥州の雪沙はごりあらぬど
 意幕の時世名「撰集」も「ま」句「成」加「ら」れ「ら」り或時むつあぐ
 後世の依業加賀の皇と「詳」せり「同」和「名」名「客」の「来」ら「る」を
 一「男」女「記」露「覚」ら「ま」ち「の」故「帳」く「系」同「く」濡「こ」め「ん」
 一「卑」下「此」を「一」を「教」ふ「の」も「を」内「り」一「復」の「系」系「於」
 系「此」名「も」等「実」女「あり」平「生」生「代」の「故」を「附」一「を」神「心」

奈里と若つる人ふ答く「あつ協あつきある身にあつ假令あつ一あつ想あつをいごと
あつ雅波あつのあつ拵あつめあつふあつぐあつ一あつ逆あつ懐あつ一あつ我あつ形あつをあつ恨あつ川あつ風あつはあつ糸あつ柳あつ逆あつああつ三
あつ玉あつ里あつみあつ新あつ川あつといあつひあつ一あつ女あつ何あつりあつ打あつくあつかあつまあつひあつああつるあつ男あつ何あつ理あつ
あつ二あつ夜あつそのあつ高あつらあつであつ睡あつぶあつとあつにあつ海あつるあつ我あつ打あつくあつみあつくあつ「あつ形あつ水あつのあつ一あつ想あつを
あつありあつやあつ房あつ書あつ淵あつ來あつれあつ拵あつめあつ何あつぐあつ一あつ或あつ時あつのあつ吟あつ一あつ思あつふあつまあつとあつ積あつであつと
あつ山あつ形あつにあつ炭あつ火あつくあつ奈あつ何あつまあつのあつ所あつれあつ娼あつ妓あつをあつ里あつらあつんあつ多あつはあつとあつのあつ人あつ若あつその
あつ実あつ情あつをあつ吐あつおあつにあつ我あつをあつのあつまあつてあつ曲あつ輪あつ成あつりあつとあつせあつ門あつ中あつおあつちあつくあつ藤あつ雲
あつ「あつ初あつ雪あつやあつ淮あつがあつ珠あつもあつさあつつあつ内あつ衣あつ若あつ同あつくあつ意あつ一あつ反あつ瘦あつとあつ人あつまあつはあつとあつふ
あつ洞あつくあつ奈あつまあつこのあつ程あつ情あつ何あつるあついあつまあつがあつもあつ後あつ容あつよあついあつとあつ強あつ一あつくあつどあつおあつほあつく
あつ付あつ依あつ

佛家奇人法書より中尾

おほよ我々古人のよみてき依趣を志してそのたらくは
 何つ免りやあそぬを實り古人交友とんと
 心のへへ至心集撰集抄隠逸傳などみなそきあり
 往年花洛子三熊海榮氏あきて閑田老人は
 筆故の里崎人傳あは編をあうはして大り
 立にけりも佛家ももよそそれ人まうむやとそ
 玄と一とりの人ひとみその例子からいそ佛家能
 奇行あるもの文明よ里あのかと八十餘人をあつめて
 ほとみ聖右の友となす此人明を失ふそえん

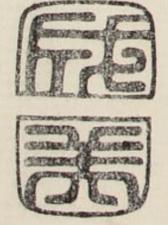
りすくぢ〜といへどもよく古人は志氣を繼
 ぐからあ〜その撰子及ふ尋常明眼の人其
 心識もるかよふ所を里といふ處〜也古人は
 よくさるるりは人す〜んを難う承へるかの色をも
 香飯もり梅のまねある處〜その子昔々子校正
 上木〜と並み披あすま〜人おこのめ家〜り
 何つくかつ孝養れ志たふとむ〜朽人子〜存子
 一語はまへあと氷黒主人より中おくらる世に風雅
 をとやふ承もものな見るとおわくを吹席を

可き初て勝敗の〜公いさ〜あれ親の編集あるを
 交らんこれ三子はるる流俗お出てきらか家
 風流をけら夷他家子た心〜ま〜あけありといふ〜
 けき語て是をよみ上件り人〜れう〜よ〜あ〜
 六の三子り崎人をけ〜りといふ〜け〜ほゆ

丙子春

豊久城録

不隨齋成美跋



豊久城録
 〆

伊家奇人談
 卷之十
 後序

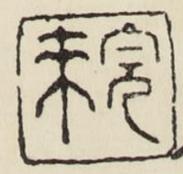
摩訶

他家奇人談跋

於此風流子好入心讀也尔
言妙... 又
あつち... 快... 者...
は... 中...
...
...
奇...

ちよとての心もまほしき
 清くは海子あつらぬね
 ちよとての心もまほしき
 よしおまほしき心もまほしき
 ちよとての心もまほしき
 ちよとての心もまほしき

秀中おのれ



玄玄居士畧傳

男 喜喜 述

先人竹内玄玄一を攝陽字號亦生依成童にて福ぐ
 似哉夫不附一同玉加たれお言なる人の能落一尋うんと
 朽よふ好てい勅らま一が守守室を名り也を足るるの何
 たへは何を思ふとも甲斐なふうんと答へ一我たか思
 ひえ尚書小いを信や唯心と獨里心眼の形あうんまを物
 はちのぶ若れ於する所亦依屋として一世まで足るるのみ
 ちよとての心もまほしき一旬に感激あるあり一畧めす
 倚く風小教多くと振附くる里張る一千里も一歩あり起
 るとりんばん掛たうんま亦と云傳変小外らげうめや
 直ちにそつ又のく一初層やあれ掉に威り柳のま里と
 一旬我吐一あり注く小教多の紙筆を其のせ里お

非家子人炎

卷二

日字身

孰水重磨と吏遊して道哉討論するよと他た一
 所里生おく徳園杖経歴する此志何り潜に亡る橋水の
 間又徘徊す休去と十許年去く武の江戸又東里津川
 一居を卜に嘗て河舟吾内にはれく徳夏を後する
 茲一軍あり又存義買明橋門語に流と較於中
 集會す明和申官勾當小進み京橋の西泚流徳又後
 居を有重軒といひ又竹窓と號す一必急も何ふつが
 濁里りり「種小屋」も流撃の沙汰や必牡丹一回此水の水
 成けり秋風風年皮立春牡丹を「留」中の春や五瀬
 之河より里橋後春に遊く一人はりり死ぬといわう
 春より「孫の起」るう許さん秋茄子とりるに踏
 いはく喜小唱ふ秋茄子覚の汁は播ませる柳と並とも始

小喰すふと是始れ始哉愚での夏と人おとる里友に何る
 生は生編より前子の生守利ありて女水水を食すまが子宮
 換す本妙に覺る氣成動し申を冷は寝る時れ是継子
 此生せばらん子を教ての流ありと或人その能借は流
 成唱る若何里解く回く松氏又借癖度公にる癖何り置
 盛記借於の屋んおとあ知智者なれども芽ぐら我好めり
 我能借すけ依も下子の一癖なる屋一と圓和歌成も嗜
 或時菅谷正正ぬく生道は夏ふと留とて申一幸りる
 一秋の濡ぬ本は禁のあけまどもお禁はのみち常いつと
 なりゆ此此区一「常」のみち常と初一母の云はるに終
 持人よ常と時五も常と流する所の常あふひお能借常又そ
 志知里に学んる子我形すあり「儒士」を常と流く流

伊家百八詠 卷之十

我傳わがぞ一ひと名な事こと女に家か望ぼうをして和わ漢かんの傳でん記き我わ傳でん一ひとむむ是こゝに
 身み此こゝふふ然しかをを顧くわんババナナリ始はじめ名な東とう夷いへへ来きててより人ひとの困くわん窮きう我わ
 救きうふふるる少すくふふるるにに有あるる身みの浮う沈ちんも亦また交ま交ま科かるる或あるはは家かをを
 若わ者しや全ぜん銀ぎんをを借かりり多たくく買かひひ人ひとはは資し用よう不ふ措そははららずずううらら傳でんてていいふ
 有あるる餘よをを換かへへてて不ふ定てい我わ補おぎふふ天てんの道みちををりりとと其その恩おん較かくちちるる
 其その中ちゆう女に如ごとく一ひと文ぶん化か改か之の比ひ年ねん中ちゆう秋あき竹たけ五ご月げつ我わ以もてて物もの有あるる
 享年しやうねん六む十じゆう有あるる三さん谷や中ちゆう長なが久きう院いん小せう華か依い
 春日かすひ有あるる感かん庭てい裏り有あるる梅ばい先せん人にん常じやう愛あい故こ詩し意い及およびび之の儀ぎ洋やう散さん人にん
 忽たち遠えん世せ上じやう物ぶつ華か後ご逝し者しや如ごとく斯しか歲さい月げつ空くう庭てい際さい嘗じやう聞き言げん亦また送そう送そう
 申まを徒た見み詠えい餘よ辭じ梅ばい花か似ごとく雪ゆき閑かん空くう地ち澄じやう雪ゆき若ごとく梅ばい感かん舊きう時じ無な奈な
 窓まど前まへ人にん玄げん裏り春はる風ふう令れい編へん憶い支し離り
 玄げん玄げん府ふ君きみ與よ余よ有あるる舊きう臨りん園えん指さ合が宿しゆく草そう是こゝ是こゝ懸けん

賦以寄竹子得
 南極 勝謙
 孝子其何似周郎恩堂平敬恭素梓送次磨風聲聲送信
 傳時俗纂編肆世名因君追慕切此儔比驢吟

題俳家奇徑
 水戸 森庸軒
 父遺此書子刻之風流道義具于茲詩歌不及俳諧妙披卷
 直達花月師

竹内車躬
 江戸 塙捨技
 申くふ今夕を逢てあはれ魂や竹白に増添う古は教く
 多此父の遺稿を車躬ぬく
 江戸 塙捨技
 出おねし云は禁竹や末をさくなき人思ふ種を奈添ら重
 水戸 岡田一琢
 赤き人の云は禁竹くく思ふくや尺一面紅も赤の如く

言勝 菅谷正正

愚問 岡田光令

十年阿ありみー面うげと露北百に月白さゆく手極あま
賢あれびたえぬ謙を愛時乃及山どちのぶ人のいめー

安樂院玄玄居士

牽牛花や

玄母老ば

又の

おがらけ



菅谷正正

うらむいてる海阿里あけれ席
露北百に十葉阿ありの秋の月て

玄玄男

音音

玄玄妻

不英

短奇形下略

おれ世哉玄里ーたらちまの云おける文ども、形く五卷
六巻の字紙こい成ぬおあふあ又考へ侍るとなつりーは
いやはー直ゆだー年月や竹のふーぐふ積海思ひ
は屋十あありまーとせれ思も素んぬはれび匿れ才仔
れー晋子ういふみも阿らんずれど能借すけるそ志にぬで
素よりお識ゆる者又等く諸邑風客名一旬哉葱ん
おや極林の二枝崑山此所玉りーく其衆一の子向やつ
かまぐ幸ふみごとく之にはさらんし
あさぐねやみ居の竹はほらんども

音音

諸國名家進福叙句并拾餘 針若不拘次序

篠原をいけり起けりて電馬あく
 階雨北中りもねくや阿き北つゆ
 並ふるは露のあれども交なるは
 初秋や村雲北うげ地成はー海
 山人亦目と昔りー高依り相一禁
 粟飯北うけ片人秋名月日如奈
 喬を秋と名定めー人ど慕うき
 雲深の裡りーいこひー霧うな
 せみ北売又すがましく鳴や秋名蝶
 水の月心す候ー三娘けふりり
 三月月の隈りー嘆古む紫然う奈

江戸 完来
 道彦
 白行
 宗瑞
 兼石
 宜麦
 午心
 佐来
 仙瓢
 青阿
 水忌

浮世と老ともいをー月三れば
 おりうげのいざ起るへり手向う奈
 夕言や抱おもをす依暗ああ急
 嘆く依名や起顔のむりー今

成美
 斗秋
 四碎
 香宜

嵐尾茶北水や弘誓の船りなみ
 石清水が流りろはよ秋のつ起
 琴北をの殺りやこーも先ぐ依秋
 みのむーや今もまうーを啼るす
 公葉北心ー実生ある奈んくも
 松風りー十三は緒の秋ゆりー

一徳
 左麓
 崑山
 貞佐
 立志
 存義

水石水が多ふうげあり秋のうせ
人此身に萩の上風おぼえ一
葉舞や利休が如きも飛鳥川
下流秋の紅葉とふうく極小雨う赤
幾筋うかりのすきほど片の葉
おぎ抱けが掃人來ふり秋此葉
舞れとぎれ虫のさだまや水のおと
稻良や秋と水種のおむけと
露や露十葉あは里れ石雲いろ
の舞やま何うの舞を今も囀く
いふづまや岩よらとけく波の中

同 二世 乾什
同 二世 紀逸
同 二世 塔亭
同 三世 冬映
同 六世 佛外
同 六世 湖十
同 二世 永棧
同 百葉
同 龜貝
同 三世 平砂
同 逸我

我の月を煙の人の秋のうせ
古ふあは居りや秋れう月と一き
葉此香やまづ一葉あまをさむ
たゆらうのちふ戸はらん秋の月
何をて今日の葉とど本様うた
阿さぐわや露も一日の葉あは
たぢぐわの葉とつて更よ初里ぐに
を麻やはびも志をりも秋あは
雨戸まで光らす家や葉れを
葉すきき文ぐれぐこのつらぬ
けさまでもなや居る月此葉
ねばあ一の居るも雲を協と裁

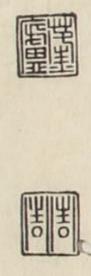
系 系 茶 龍
同 同 雲 雄
同 同 定 種
同 同 月 居
同 同 菊 和
同 同 菊 淵
同 同 丘 高
同 同 鳥 頂
同 同 末 糖
同 同 岳 輪
同 同 竹 育
同 同 卑 池

名存や思もつらまばよもすら
ぬるも存れわらば者ぬ屋
山里やあごせまうも素然と
たさ記の何るもろありぬ屋
山此井の水汲よまうも葉のは素
寝く起て手柄が師やけさの秋
申しくお人もむおぬく秋れら
いうるや遊ぐ帰家あきの山
あはれいであてられんぞう消
七夕も穀でもあうも秋あま
まきや苦うさむき癖がつく
あう記や起く仏をさうはれす

同	甲斐	同	越後	加賀	信濃	同	お控	下谷	あ府	陸奥	南社
秋舉	可記屋	嵐が	萬嘯	其谷	素榮	一葉	葛三	太節	松長	乙二	素江

米多く持くはびー記憶う素
舞の心を長うするをちうぬ
虫賣れまごをぬる後のたもとうあ
秋秋のなつ記やすー出たのまをれ
魂を存るもあいの世にひりり
おまごの存るもあうぬど相をこを
猶妻にかさうととるる世屋うあ
いあつちや獨りおちく協材を喜
附ていふ清風英士の秋海をひ入といふ
件多ふはの秦胡道屋たうりく句成
求るうー使を記を
以て此ゆをちあり

同	因幡	長後	紀後	安藝	松前	薩摩	
平南	雷沙	月化	鞠風	並竹	管光	布席	關雙



蓬廬青青先生撰目

竹窓玄玄大人遺意

一 俳家奇人談 全三冊 出来 青青先生 著

一 續俳家奇人談 全三冊 追刻 同 著

予編奇人談乃落穂をむらひに代り名家藝太閤更晚臺蓋村
好義等平々の漢成あびく其風調を志らむ

竹窓玄玄大人遺意

一 古今俳諧詠物句選 全三冊 未刻 同 著

四季詠物浅増加し平有梅題あり古人連絶古実不季此歌等なり
玄玄より一季寄玄玄詠物をあひて百二十六首初の捷徑とあり
附録一巻より玄玄先生乃随筆より一巻あり一巻古句を採り且
くいふ一肝要なりどもを載せり

一 俳諧伊呂波引 全五冊 未刻 同 著

人倫益財鳥魚草木言語等にいり多し部類を分て其雅俗を
辨ししき無字を集て俳家座者に備へるべき詠書なり

文化年三丙子年仲秋落成

浅草御堂前

松澤庄八 各

同 新寺町

和泉屋庄次郎

同 南馬道町

栗村半藏

通油町

鶴屋喜右衛門

各 同 志 開 版

江戸書林

